
BAD END & HAPPY END

爾愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A D E N D & H A P P Y E N D

【Nコード】

N 5 4 9 7 H

【作者名】

爾愛

【あらすじ】

ある大親友2人がゲームの●に、入ってしまった。どっちがB A D E N DでどっちがH A P P Y E N Dなのか？友情たっぷりのホラーストーリー

（前書き）

この作品は友情ホラーです。

疑問をわざと作っているので気にしないでください。人によっては、疑問がない場合もありますのでご了承ください。

疑問だらけのストーリー 「BAD END&HAPPY
END」

「くそおお！！また負けた…」

啓二がゲームのコントローラーを投げ捨てた。

啓二はあるゲームと戦っていた。そのゲームの名前は、「恐怖の人生」というゲームだ。

色々な場所に進み、ゾンビやヴァンパイアを倒すゲームだ。啓二はまだ初心者といえるだろう。なにしろ啓二はまだボスステージまでも行つた事がないのだ。

「このゲームあいつクリアしてんのに…俺出来ないとか…情けねえよな」

啓二が呟いた。すると、外から声が聞こえた。

「おゝい、啓二！！一緒に遊ぼうぜー」

啓二は大親友の宏樹だとすぐ分かった。

「…あ、そうだ！宏樹にやってもらおっと！宏樹も持ってたな、確か」

啓二はすぐさま外に出て、弘樹にやってもらえないかと言った。

弘樹は戸惑ったが、啓二の粘り強さでOKを出した。

「サンキュ！！」

啓二は飛び跳ねた。

「サッカーしたかったのにな…ま、いつか」

宏樹は呟いた。

「ハハ、ごめん」

「いいよ、別に。親友だろ??」

「そうだったな、ありがとう」

家に入ると、さっそくやってもらった。

啓二は目を開いた。弘樹はまるで人間じゃないかのように、手早い。いや、手早すぎる。この時の宏樹の顔は化け物みたいに恐ろしい。だから話しかけようとしても、怖すぎで、話しかけられない…。

「クリア」

弘樹が微笑んだ。ゲーム中の顔とは正反対だ。

「ありがとう！これ・・次難しい？」

「ん・・まあこれ以上難しいってところかな？俺は余裕だったけど」

宏樹が自慢げに答えた。

「え…これ以上とか無理ジャン！俺はここで、ギブアップなのに！助けてくれー！」

啓二は宏樹にしがみついた。

すると、宏樹は、少し悲しそうな顔をして答えた。

「…啓二…もう止めといた方がいいぞ…じゃあな」

「チョ待てよ！もう帰るのか？」

啓二が言ったがもう弘樹は瞬間移動したかのように消えていた。

「宏樹ったら、最近変だな、意味不明・・」

啓二は不思議に思った。

『そっいや、宏樹「もう止めといた方がいい」って言ってたなあ。どういうこと何だ？ゲームを止める？って事…？お前にはもう無理って事か…』

そう思い、啓二はだんだん腹がたってきた。しかし、まだ啓二は気づいていなかった…。

次の日

まだ啓二は腹がたっていた。

「俺を馬鹿扱いにしてる…宏樹マジうざい」

すると、1階から電話の音がして、しばらくすると、音が消えた。お母さんが電話に出たと思った。その勘は的中した。しかし、啓二のお母さんは悲しそうな顔をして、啓二にこう言った。

「さつき宏樹君のお母さんから電話があつてね。弘樹君今日心臓発作で亡くなつたんだって。それも、ゲーム中に…」

「え……嘘だ……嘘だああああああああ……！！！！！！！！！！」

啓一は叫んだ。

「ママに言われても仕方ないわよ… 神様が決めたことなんだから」

啓二のお母さんが言った。

すると啓二は即行外へ出た。涙を隠して……。

啓二はある公園に座り、考えた。

「……待てよ、俺を馬鹿にした報いなのか……？」

「そう思うと嬉しくなってきた。」

『何してるんだ！大親友が死んだんだぞっ！？嬉しいがってどうする？』

啓二は自分に言い聞かせた。啓二は自分が自分じゃないみたいにしてきた。

『そういや、宏樹はゲームをしながら死んだ、よな？そして、昨日弘樹は俺にゲームを止めといた方がいい、と言った…。もしかして……。…そんな事あるわけないよな…。』

すると、どこからか見覚えのある声が聞こえてきた。そう、宏樹の声だった。

「啓二・・・俺だ・・・宏樹だ。お前には話さないとけないことがある。俺がゲームを全てクリアしたときから、何かが俺に「お前は死ぬ」と囁いてきて、最初は別に気のせいだと思い、普通に過ごしてたんだけど、後からだんだん自分が自分じゃないと感じてき

たんだ。しばらくして、俺は家出何もしない時にまた何かが俺に「さようなら…」と囁いてきた。その瞬間俺がゲームをしていたんだ…。それっきり何が何かわかんなくなっただ…。気がついたら、俺はここにいた。」

啓二は驚いた。

「宏樹！どこだ！？……！！お前は死んだはず…。」

「啓二！お前……。までも……。なぜ！周りを見てみる！」

「ここはどこだ؟؟宏樹！教えてくれ！」

啓二はパニック状態になっていた。

「ここは……。ゲームの世界なんだ……。『恐怖の人生』の。っていうか、何でお前もいるんだ！？俺はゲームをクリアして、ここへ来ちゃった。お前は……。クリアしたのか？」

「いいや……。俺は…ま、まだ……。して、してない」

啓二は腰を抜かしかけた。後ろに何かがいる…。ゆっくり啓二が振り返る。すると後ろにゾンビが……。いた。

「アアアアアアア！」

啓二は叫んだ。しかし、なんと弘樹が啓二をかばったのだ。

「け、啓二！早く行け……。早く！！ここから…に、逃げる方法を見つけるんだ！」

「宏樹……。ありがとう…宏樹！！！」

啓二は涙を拭き、言った。

「お前はまだゲームをクリアしてないはずだろ…？だからきつと逃げ出せる…。は、はずだ」

「お、おう！またな……。！」

啓二は言った。

「もう会えないだろ……。！？さようなら……。だろ！？さ、さよう……。」

宏樹はそこまで言ったが、もうゾンビが食い殺していた。

「……。宏樹のためにも！抜け出す！」

啓二はとにかく走り続けた。ヴァンパイア・ゾンビ。なんとボス

までも抜かして・・・。

「え…行き止まり…」

しかし、行き止まりと思っていたのが、左に黒いドアがあった。啓二は戸惑わずに、ドアを開けた。中に入ると、そこには見覚えのある場所だった。それは啓二の家の玄関だった。

「げ、現実だ!」

啓二は叫んだ!

「啓二、お帰り。気持ちおさまった??」

啓二のお母さんがリビングのドアから出てきた。

「うん・・・だいぶね。何時間くらい俺外にいた?」

啓二は聞いた。

「何時間も外にいなかったじゃない。20分くらいだけでしょ、もうっ啓二ったらー」

啓二のお母さんは微笑んだ。

「あ、そんぐらいだったね。ごめん」

本当は啓二は、何時間という位長く外（ゲームの世界）にいたと思っていた。

「啓二おかしいわよ?病気?(笑)」

「ち、違っつて…」

啓二は少し焦った。だってまたあの世界にいったらどうしようと思っただけから・・・。

（後書き）

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5497h/>

BAD END & HAPPY END

2010年10月15日23時51分発行